

# 日本語の形容詞述語の統語構造に関する覚書： 多重主格構文の考察から

森田 千草

国際コミュニケーション学科

## 1. はじめに

日本語では、ひとつの述語に対して主格を持つ名詞句が複数生起することがある。

- (1) a. 健が背が高い (こと)  
b. 花子が髪が長い (こと)  
c. 太郎が欲が深い (こと)

(1) の構文では、形容詞「高い」、「長い」、「深い」は一項述語であるにも関わらず、主格「が」を持つ名詞が 2 つ生起している。さらに、「健が兄が背が高い」や「花子が姉が髪が長い」のように、3 つ以上の主格名詞句が生起することも可能である。本稿では主格名詞句が 2 つ現れる場合に限定し、最初に現れる主格名詞句（「健が」「花子が」「太郎が」）を N (ominative) DP1、2 つ目に現れる主格名詞句（「背が」「髪が」「欲が」）を NDP2 と呼ぶことにする。(1) の多重主格名詞句を含む形容詞述語構文では、NDP1 と NDP2 には全体と部分の関係、つまり分離不可能所有 (inalienable possession) の関係が成立する。例えば、(1a) の「背」は「太郎」の身体的特徴、「髪」は「花子」の身体的部分であり、また「欲」は「太郎」の性格の一部である。

(1) の構文では、(2) のように NDP1 は省略することが可能だが、NDP2 を省略することはできない。

- (2) a. (健が) 背が高い  
b. (花子が) 髪が長い  
c. (太郎が) 欲が深い  
(3) a. ??/\*健が高い (こと)<sup>1</sup>  
b. ??/\*花子が長い (こと)  
c. ??/\*太郎が深い (こと)

また、NDP1 は常に NDP2 に先行しなければならず、(短距離) かき混ぜ操作により NDP2 が NDP1 に先行することは許されない。<sup>2</sup>

- (4) a. \*背が健が高い (こと)  
b. \*髪が花子が長い (こと)  
c. \*欲が太郎が深い (こと)

(1) に挙げた形容詞以外にも、複数の名詞が主格「が」を伴って現れることがある。

<sup>1</sup>西内 (2016) は、(i) のように形容詞「高い」が名詞句項を一つしかとらない場合、〈価値〉の意味を表出するとしている。

- (i) a. 彼女は高い  
b. その靴は高い

西内のインフォーマント調査によると、(ia) は、「彼女とデートするといいい店に行かなければならないためお金が高くつく」や「彼女がサービス業に従事しており、彼女のサービスを受けるためには高い料金を要する」という意味を持つ文として解釈されるという。そのため、(1a) もこの意味での解釈は可能であると考えられる。本稿では、この解釈を持つ場合については扱わない。

<sup>2</sup>NDP2 「背が」「髪が」「欲が」に焦点を置くために、NDP2 の後にポーズを置いたり、音声ピッチを上昇させたりした場合には、(4) の例は容認可能となる。

- (5) a. 花子とその本が欲しい (こと)  
 b. 健が花子が好きだ  
 c. 健がスペイン語が分かる (こと)  
 (6) a. 東京が高層ビルが多い (こと)  
 b. 日本が女性の平均寿命が長い (こと)

(5a-b) の心理形容 (動) 詞、(5c) の状態動詞は、主語と目的語の2つの項を取る二項述語である。こうした他動性の低い二項述語の場合、主語だけでなく目的語にも主格「が」が伴うことが観察されている。また、(6) の形容詞は一項述語であるが、NDP1と NDP2の間に分離不可能所有の関係が成立していない。この場合、NDP1の主格「が」を「に」や「で」で置き換えることが可能であることから、NDP1は場所を表していると考えられる。本稿では、(5) や (6) のような例は扱わず、(1) に示したように一項形容詞が述語となり、分離不可能所有の関係が成立する2つの主格名詞句が生起する構文について考察する。また、この構文を「二重主格名詞句を持つ一項形容詞述語 (One-place Adjectival Predicate with Double Nominatives、以下略して OAPDN) 構文」と呼ぶことにする。

本稿は、OAPDN 構文の統語構造のひとつの可能性を提示することを目的とする。本稿の構成は以下の通りである。2節では多重主格構文に関する先行研究として、Akiyama (2003) の分析を概観する。3節では、由本 (2009) および由本・影山 (2009) の複合語の考察を基に、OAPDN 構文における主格名詞句の統語的特性について検討する。3節での観察を踏まえ、4節では OAPDN 構文の統語構造のひとつの可能性を提示する。5節は本稿のまとめである。

## 2. 先行研究

### 2.1 Akiyama (2003) の多重主格構文の分析

Akiyama (2003) は、多重主格構文の NDP1 と NDP2 に所有関係がある場合、基底構造において NDP1 は NDP2 の指定部に生成されてひとつの名詞句を形成すると提案する。Akiyama は、NDP2 の指定部には NDP1 の痕跡以外の空範疇 (変項 (variable)、pro、PRO) が生起することは不可能であると主張する。まず、変項は局所的に A' 束縛される必要が

あるが、A位置にある NDP1 が束縛子となるため、NDP2 の指定部に変項は生起することはできない。次に、pro であればその位置に照応形の「自分」あるいは「自分自身」が生起することが可能である。しかし、Akiyama は、(7) の例を挙げ、NDP2 の指定部の位置に照応形が生起することは不可能であることから、この位置に生起するのは pro ではないと指摘する。

- (7) a. 太郎が<sub>i</sub> [[\*{自分の/自分自身}の ] 手が] 長い  
 b. 太郎が<sub>i</sub> [[\*{自分の/自分自身}の ] まぶたが] 腫れた

(Akiyama 2003 : 54 : (13a-b))

最後に、PRO の場合、NDP1 とは別の  $\theta$  役割を持つことになる。しかし、Akiyama は (2) のように NDP1 が省略可能である事実を挙げ、NDP2 にある空範疇が NDP1 とは別の  $\theta$  役割を持つとは考えられないため、この空範疇は PRO ではないと主張する。こうした事実から、Akiyama は NDP2 の指定部にある空範疇は NDP1 の痕跡だと提案する。

また、Akiyama は、多重主格構文における2つの主格名詞句は、「DP1 の DP2」のように最初の DP が属格を持ち2つ目の DP 内に生起して1つの名詞句を形成する場合と同じ統語的振る舞いを示すと指摘する。その例として、多重主格構文における主語尊敬語の容認可能性が、「DP1 の DP2」形の名詞句を持つ場合と同じであることを観察している。

- (8) a. 先生のお顔がきれいだ  
 b. [DP<sub>3</sub> [DP<sub>2</sub> [DP<sub>1</sub> 先生] の馬鹿な弟子] の (#お) 顔] がきれいだ  
 c. [DP<sub>3</sub> [DP<sub>2</sub> [DP<sub>1</sub> あの馬鹿な学生] の有名な先生] の (#お) 顔] がきれいだ

(Akiyama 2003 : 57 : (20a, e, f))

- (9) a. 先生が (#お) 顔がきれいだ  
 b. [DP<sub>2</sub> [DP<sub>1</sub> 先生] の馬鹿な弟子] が<sub>i</sub> [DP<sub>3</sub> t<sub>i</sub> (#お) 顔] がきれいだ  
 c. [DP<sub>2</sub> [DP<sub>1</sub> あの馬鹿な学生] の有名な先生] が<sub>i</sub> [DP<sub>3</sub> t<sub>i</sub> (#お) 顔] がきれいだ

(Akiyama 2003 : 57-58 : (21a, e, f))

の「まぶたが」腫れた(こと)

さらに、Akiyama は、NDP1は顕在的に TP の指定部へ移動する一方、NDP2は移動せずに元位置である VP 内部 (predicate-internal) に留まると提案する。(10) に示すように、NDP2は短距離かき混ぜ操作を受けることができない。

- (10) a. \* $[t_1 \text{ 手が}]_2$  太郎が  $t_1$  長い  
 b. ? $[t_1 \text{ 手が}]_2$  僕は「太郎が  $t_1$  長いと」思った  
 た (Akiyama 2003 : 55 : (15a-b))

ある要素の痕跡を含む構成素がその痕跡の先行詞を越えて移動する場合、2つの移動は同じタイプであってはならないとされる (Müller 1996, Tsujioka 2001)。Akiyama によれば、日本語における短距離かき混ぜも A 移動と考えられており、NDP1が TP の指定部へ顕在的に A 移動する場合、(10) では2つの A 移動が起きていることになる。従って、Akiyama は NDP2の指定部に基底生成された NDP1が TP の指定部へ顕在的に A 移動するため、NDP1の痕跡を含む NDP2に対して短距離かき混ぜ操作を適用することができないと主張する。

## 2.2 Akiyama (2003) の問題点

Akiyama (2003) は、多重主格構文において NDP1と NDP2の間に所有関係が成立する場合、基底構造において NDP1は NDP2の指定部に生成されると提案する。しかし、NDP2の指定部にある空範疇が NDP1の痕跡ではないことを示唆する事実がある。Akiyama は、NDP2の指定部に存在する空範疇が pro ではない理由として、(7) のように、NDP2の内部に「自分」や「自分自身」といった照応形が生起できないと主張する。しかし、(11) に示すように、NDP1と NDP2の間に「驚くほど」のような副詞が存在すると、多少容認度が落ちるものの、NDP2の内部に照応形が生起することが可能となる。

- (11) a. 太郎が、驚くほど  $[?_{\text{自分の/自分自身}}]$  の「手が」長い(こと)  
 b. 太郎が、驚くほど  $[?_{\text{自分の/自分自身}}]$

従って、NDP2の指定部にある空範疇は、NDP1と同一指標を持つ pro であることが可能である。NDP2の指定部に NDP1の痕跡ではなく pro が生起するという仮定の下でも、Akiyama が挙げている事実 (主語尊敬語に関して多重主格構文が「DP1の DP2」として1つの主格名詞句が生起する場合と同じ容認度を示すこと、NDP2が短距離かき混ぜの操作の適用を受けることができないこと) を正しく説明することができる。

本稿では、以下の仮説を立てて議論を進めていく。

- (12) a. OAPDN 構文における NDP1と NDP2は、基底構造においてひとつの名詞句を形成せず、それぞれ異なる統語位置に生起する。  
 b. OAPDN 構文の NDP2の指定部には NDP1と同一指標を持つ空範疇 pro が存在する。

4 節において、この仮説が妥当であることを提示する。

## 3. OAPDN 構文における主格名詞句の統語的特性：複合語の考察から

3 節では、OAPDN 構文における主格名詞句の統語的特性について考察する。

まず、NDP1は (11) のように照応形「自分自身」の先行詞となることが可能であることから、統語的に形容詞述部の主語として振る舞う。また、後述するように、NDP1は意味的側面からも形容詞述部の主語であると考えられる。

次に、述語内の NDP2の統語的特性について、複合語の考察を通して検証する。3.1 節では、由本 (2009) および由本・影山 (2009) による複合形容詞の分析から、NDP2が述語の内項として生起する可能性があることを提示する。しかし、3.2 節において、杉岡 (2002) の複合語の音韻的特性の観察を基に、NDP2が述語の付加詞として生起することを提案する。

### 3.1 NDP2を内項とする分析：由本（2009）および由本・影山（2009）

由本（2009）、由本・影山（2009）の日本語と英語の複合形容詞の分析は、OAPDN 構文のNDP2が形容詞述語の内項であることを提示する。由本（2009）によると、日本語で生産的に形成される複合形容詞は、(13) のような形容詞と主格名詞句が結合したタイプである。

- (13) 筋骨たくましい、草深い、奥深い、意地汚い、意地悪い、きめ細かい、口うるさい、口汚い、口軽い、口堅い、目ざとい、腹ぎたない、腹黒い、耳速い、幅広い、かさ高い、格式高い、香り高い、気短い、気長い、気前良い、鼻高い、腰高い、名高い、見目麗しい、関係深い、興味深い、なじみ深い、欲深い、未恐ろしい  
(由本 2009 : 210-211 : (6a))

例えば、「腹黒い」は「腹が黒い」とパラフレーズすることができることから、由本はこれらの複合形容詞は「いわば主語に相当する名詞」と形容詞が結合したものと述べる。

一方、由本によると、英語の複合形容詞は主要部が V-en、V-ing、V-able のような動詞から派生した形容詞ではなく、本来の形容詞が主要部となる場合、(14a) のように形容詞が選択する項である名詞が結合したタイプと、(14b) のように修飾語として解釈されるタイプが生産的であるとされている。

- (14) a. duty-free, heat-resistant, class-conscious, oil-rich, light-sensitive, species-specific  
b. midnight-blue, crystal-clear, sky-high, razor-sharp, sunshine-warm  
(cf. 由本 2009 : 210 : (2-3))

由本は、英語の生産的な複合では、主要部が補部を取る場合、いくつかの例外は存在するものの、補部との結合が優先されると述べている。補部があるにも関わらず、修飾語として解釈される要素と結合することや、「主語」と結合して複合語を作るとは許されない。

- (15) a. covered with cloth by a farmer → cloth-covered / \*farmer-covered  
b. (country is) rich in oil → oil-rich / \*country-rich  
(由本 2009 : 210 : (4a), (5a))

しかし、上で述べた通り、日本語の複合形容詞では、「主語」と結合したタイプが生産的であり、補部と結合することはできない。

- (16) 健は(味にうるさい/ \*味うるさい) {酒に強い / \*酒強い} / {金に汚い/ \*金汚い}  
(cf. 由本 2009 : 211 : (7))

こうした日英語の複合形容詞の差異について、由本・影山（2009）は両言語の形容詞の項構造が異なるためであると分析し、それぞれの統語構造を以下のように仮定する。

- (17) a. [They [are conscious [of fashion]]]  
b. [あの人は[気が[短い]]]

由本・影山は、両言語ともに複合語は「構造上、主要部に最も近い要素が複合される」ことで派生すると説明する。(17a) が示す通り、英語の形容詞の項構造で主要部 conscious と統語的に近い位置にあるのは前置詞補部 of fashion であるため、主要部 conscious と補部 of fashion が結合して複合語が形成される。一方、日本語の形容詞の構造では、(17b) のように、「あの人」という大主語、「意地」という小主語という2つの項が存在する。小主語が主要部と構造的に近い内項の位置にあるため、「意地」が「悪い」と複合することが可能である。

複合形容詞が主格名詞句と形容詞が複合して派生したものであると分析すると、OAPDN 構文と統一的に捉えることができる。つまり、OAPDN 構文の NDP2 が形容詞と結合した場合、(13) の複合形容詞が派生すると考えられる。

- (18) a. 花子が口が軽い (こと) → 花子が口軽い (こと)

- b. 太郎が腹が黒い（こと）→ 太郎が腹黒い（こと）  
 c. 健が欲が深い（こと）→ 健が欲深い（こと）

ただし、OAPDN 構文において、すべてのNDP2が形容詞と複合することができるわけではない。しかし、主要部との複合の可否は統語構造とは別の要因に因るものだとすると<sup>3</sup>、由本（2009）および由本・影山（2009）の分析は、OAPDN 構文のNDP2は形容詞の内項として生起することを提示する。

また、由本・影山は、複合形容詞は大主語との間に叙述関係が成立すると述べていることから、OAPDN 構文においてNDP2は形容詞と述部を形成し、NDP1がその形容詞述語の主語であると考えられる。

### 3.2 NDP2を付加詞とする分析：杉岡（2002）

3.1節では、由本（2009）および由本・影山（2009）の複合形容詞の分析から、OAPDN 構文においてNDP2が形容詞の内項として生起することを提示した。しかし、杉岡（2002）の動詞由来複合語の音韻的側面からの観察を基に、NDP2が内項ではなく付加詞として生起することを提案する。

杉岡は、日本語の動詞由来複合語をその意味的性質から、動詞の連用形が内項と複合するタイプと付加詞と複合するタイプに分類する。

- (19) a. 内項と複合：窓ふき、雪解け、酒飲み、ねじ回し、物知り、車寄せ、夕暮れ  
 b. 付加詞と複合：手作り、早食い、船酔い、薄切り、石造り

この2つのタイプは統語的側面からも区別される。例えば、内項と複合するタイプは「する」を伴って動詞として使うことができないが、付加詞と複合するタイプはそれが可能であることが観察されている。

杉岡によると、これら2つのタイプは音韻的にも

異なる振る舞いを示す。第一に、内項を含む複合では真ん中が高いアクセントを持つ（起伏型）であるのに対し、付加詞を含む複合は最初のモーラ以外が高いアクセントとなる（平板アクセント）のことが多い。(20) では、アクセントのあるモーラを上線で示してある。

- (20) a. 内項と複合：ほんよみ（本読み）  
 b. 付加詞と複合：ぼーよみ（棒読み）、たちよみ（立ち読み）  
 （杉岡 2002：126：(113)）

第二に、2つのタイプの複合は、連濁の有無においても相違が見られる。

#### (21) 内項の複合/付加詞の複合

汗拭き、窓拭き（ふき）/空拭き、モップ拭き（ぶき）  
 布団干し、物干し（ほし）/陰干し（ぼし）  
 手紙書き、小説書き（かき）/手書き、走り書き（がき）

（cf. 杉岡 2002：127（117））

杉岡の観察を踏まえ、複合形容詞の音韻的特性を考察する。最初に、アクセントに関して、動詞の連用形が付加詞と複合する場合と同様、平板アクセントを持つ。

- (22) おくぶかい（奥深い）、いじわるい（意地悪い）、くちうるさい（口うるさい）、はらぐろい（腹黒い）、はばひろい（幅広い）、よくぶかい（欲深い）

なお、NDP2が形容詞と複合せずに独立して生起する場合、以下のようなアクセントを持つ。

- (23) おくがふかい（奥が深い）、いじがわるい（意地が悪い）、はらがくろい（腹が黒い）、

<sup>3</sup> 由本・影山（2009）によると、適格な複合語を形成するためには、「大主語」と「小主語」が分離不可能所有の関係にあること、形容詞が一時的ではなく恒常的な属性を表すもの、という2つの条件がある。また、この2つの条件が満たされていても、「小主語」が形容詞と複合できない場合があることを指摘している。

はばがひろい（幅が広い）、よくがふかい  
（欲が深い）

次に、連濁に関しても、付加詞の複合の場合と同様、多くの複合形容詞の場合に生じることが観察される。

- (24) おく（奥）+ふかい（深い）→おくぶかい（奥深い）  
 はら（腹）+汚い（きたない）→はらぎたない（腹ぎたない）  
 はら（腹）+くろい（黒い）→はらぐろい（腹黒い）  
 かさ+たかい（高い）→かさだかい（かさ高い）  
 かくしき（格式）+たかい（高い）→かくしきだかい/かくしきたかい（格式高い）  
 かおり（香り）+たかい（高い）→かおりだかい/かおりたかい（香り高い）  
 な（名）+たかい→なだかい（名高い）  
 よく（欲）+ふかい（深い）→よくぶかい（欲深い）

従って、アクセントや連濁といった音韻的特性は、(13)の複合形容詞は形容詞と付加詞の複合により派生されたものであることを提示する。

ただし、田川（2010）は、杉岡の一般化に当てはまらない例も少なくないことを指摘する。そのため、さらなる詳細な考察が必要であるが、本稿では杉岡の観察が正しいと仮定し、複合形容詞は付加詞として生じた名詞と形容詞が結合したものであると考える。また、OAPDN 構文の形容詞述部が複合形容詞と同じ統語構造を持つという前提の下、NDP2は形容詞述語の付加詞として生起すると主張する。

NDP2が付加詞であるという提案は、この名詞句が形容詞述語によって選択された項ではないという

<sup>4</sup> 西山（2019）の提案は、本稿の分析とは全く異なるものである。西山は、(25a) / (26a) と (25b) / (26b) はそれぞれ (ia)、(ib) から派生すると提案する。

- (i) a. The country's oil is rich.  
 b. 健の欲が深い

詳細は西山（2019）を参照のこと。

ことを意味する。つまり、NDP2は統語的には形容詞述語の主語ではないということになる。

#### 4. 一項形容詞述語の統語構造に関する一提案

4節では、分散形態論の枠組みを用いて、OAPDN 構文の統語構造のひとつの可能性を提示する。

由本・影山（2009）は、複合形容詞において大主語と形容詞述部との間に叙述関係があり、またその述部内部では小主語と形容詞との間に叙述関係が成立すると主張する。この主張に従って、OAPDN 構文においても、NDP1と形容詞述部との間に叙述関係が成立すると考える。しかし、NDP2が付加詞として生起とするならば、NDP2と形容詞の間には叙述関係はないことになる。

そこで、本稿では、NDP2は形容詞の意味を限定する修飾要素であると提案する。西山（2019）は、英語と日本語の複合形容（動）詞には意味的な共通点があるとし、(25a) と (26a)、(25b) と (26b) はそれぞれ同じ統語構造から派生すると提案する。

- (25) a. The country is rich in oil.  
 b. 健は欲が深い  
 (西山 2019 : 253 : (10))  
 (26) a. The country is oil-rich.  
 b. 健が欲深い (こと)  
 (西山 2019 : 254 : (14))

西山は、(25a)の rich は単に国が豊かという意味ではなく、石油に関して豊か、つまり in oil により rich の意味が限定されていると述べている。同様に、(26a)の複合語の左の要素である oil も rich の意味を限定する役割をなしている。同様に、(25b)、(26b)の日本語も「健は欲に関して深い」という意味であり、「欲」が基の形容詞「深い」をある意味において限定しているとする。<sup>4</sup>

そこで、OAPDN 構文において、NDP2は付加詞

として生起し、形容詞の意味を限定する役割を果たしていると考えられる。しかし、NDP2は付加詞であるにも関わらず、1節で提示したように省略することが許されない。

- (27) a. 健が ??/\* (背が) 高い (こと)  
 b. 花子が ??/\* (髪が) 長い (こと)  
 c. 太郎が ??/\* (欲が) 深い (こと)

OAPDN の構文においてNDP2の生起が義務的であるという事実は、日本語の形容詞（特に次元形容詞）が多義的であることに起因すると考える。西内（2016）によると、例えば、形容詞「高い」の中心義は次元的意味（＜次元性＞）であるが、派生義として尺度性のある＜価値＞や＜度合い＞の意味も有する。西内は、「その靴は高い」は「靴の値段が高い」ことを意味しく＜価値＞の意味が表出するが、「その靴はヒールが高い」のように「が」格により＜次元性＞を受ける部分を指定されることにより、＜次元性＞の意味が表出すると述べている。言い換えれば、次元形容詞の意味を一義的に決定するためには、＜次元性＞を受ける部分を指定する必要があるということになる。つまり、NDP2は＜次元性＞を受ける部分を指定する役割を果たしていると言える。

そこで、(次元)形容詞が解釈されるためには、意味を限定するための要素を導入する機能範疇主要部（ここでは仮にFとする）が形容詞の投射範疇（分散形態論の枠組みに基づいて  $aP$  と考える）と併合すると提案する。機能範疇主要部Fは、その投射FPの指定部に形容詞の意味を限定する要素Xを導入することによって、形容詞の意味が「Xに関して」と限定する。つまり、NDP2は機能範疇FPの指定部に生起することで、形容詞の意味が「NDP2に関して」と限定される。

この仮定に基づき、本稿では、OAPDN 構文は以下のような統語構造を持つと提案する。

- (28)  $[_{TP} [_{PredP} [_{NDP1}$  健が $]; [_{FP} [_{NDP2}$  pro $_i$  背が $] [_{aP} [_{\sqrt{P}}$   $\sqrt{\text{高い}}]a] F] Pred]T$

OAPDN 構文の形容詞は一項述語であるため、形

容詞の語根は補部を取らずに単独で $\sqrt{P}$ を投射する。 $\sqrt{P}$ は形容詞を派生するために、機能範疇主要部  $a$  と併合する。

形容詞の投射範疇  $aP$  は機能範疇主要部Fと併合して、FPの指定部に形容詞の意味を限定するNDP2が導入される。また、NDP2が物体（人間）の特徴、性質、身体的部分などを表す場合、その指定部に物体全体（人間）を表す名詞と同一指示を持つ空範疇  $pro$  が生起すると提案する。これは、NDP2の名詞の語幹の意味により要求されるものと考えられる。

さらに、NDP1と述語の間の叙述関係は、機能範疇主要部  $Pred$  (ication) の存在により成立すると考える。Bowers (1993) や Nishiyama (1999) によると、形容詞が述語として機能するためには、形容詞句の上に機能範疇  $PredP$  が投射され、形容詞述語の主語は  $PredP$  の指定部の位置に導入される。NDP1は、(11) が示すように照応形「自分自身」の先行詞となることから、統語的に形容詞述部の主語として機能する。また、3節で述べた通り、意味的な側面からも、NDP1はNDP2を含む形容詞述部の主語であると考えられる (cf. 由本・影山 2009: 250)。そのため、NDP1は形容詞述部の主語として  $PredP$  の指定部に基底生成され、TPの指定部へ移動すると提案する。

3節で杉岡（2002）の複合語の音韻的特性の観察を基に、NDP2は形容詞の内項ではなく付加詞として生起することを提示した。(28)の統語構造が示すように、NDP2は機能範疇主要部によって導入された項であり、形容詞の語根によって選択される内項でも、また機能範疇  $Pred$  により導入される主語でもない提案する。しかし、NDP2は形容詞の語根に構造的に一番近い位置に生起する項であることから、その他の条件を満たせば、NDP2は形容詞の語根と結合して複合語として派生されることが可能である。

## 5. まとめ

本稿では、複合語の考察を基に、二重主格名詞句を持つ一項形容詞述語（OAPDN）構文の統語構造のひとつの可能性を提示した。まず、主格名詞句は基底構造においてひとつの名詞句を形成しないこと

を示した。また、2つの主格名詞句間に分離不可能所有の関係が成立する場合、全体を表す主格名詞句は述部の主語として、部分を表す主格名詞句は述部の付加詞として生起することを提示した。さらに、部分を表す名詞句は形容詞の意味を限定する役割をすることを提案した。

今後は、本稿で扱わなかった形容詞述語や多重主格構文についても考察を行い、ここで提案した統語構造の分析の妥当性を検証したい。

## 参考文献

- Akiyama, Masahiro (2003) "Multiple Nominative Constructions in Japanese and Their Theoretical Implications," Ji, Dong Hong Kim TengLua (eds.), *Proceedings of the 17th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*, 51-61, Sentona.
- Bowers, John (1993) "The Syntax of Predication," *Linguistic Inquiry* 24, 591-656.
- Müller, Gereon (1996) "A Constraint on Remnant Movement," *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 355-407.
- 西内沙恵 (2016) 「多義的次元形容詞の構造とその導入に関する一考察」, 『日本語教育実践研究第3号』, 148-156, 立教日本語教育実践学会.
- Nishiyama, Kunio (1999) "Adjectives and the Copulas in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 8, 183-222.
- 西山國雄 (2019) 「日英語の複合形容詞—oil-richと「欲深い」の平行性—」, 西原哲雄・都田青子・中村浩一郎・米倉よう子・田中真一(編), 『言語におけるインターフェイス』, 開拓社, 東京.
- 杉岡洋子 (2002) 「第3章 複数のレベルにまたがる語形成」, 『語の仕組みと語形成』, 69-145, 研究社, 東京.
- 田川拓海 (2010) 「X+動詞連用形複合語の記述的整理: 音韻論的特徴を中心に」, 『筑波学院大学紀要第5集』, 157-163, 筑波学院大学.
- Tsujioka, Takae (2001) "Improper Remnant A-movement," Kim, Minjoo and Uri Straus (eds.), *Proceedings of the North East Linguistic Society* 31 : 1, 483-500, GLSA, Massachusetts.
- 由本陽子 (2009) 「複合形容詞形成に見る語形成のモジュール性」, 『語彙の意味と文法』, 由本陽子・岸本秀樹(編), 209-229, くろしお出版, 東京.
- 由本陽子・影山太郎 (2009) 「第7章 名詞を含む形容詞」, 影山太郎編『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』, 223-257, 大修館書店, 東京.